ける。セルビアの農民大衆、およびこの政治的覇権主義を是認しないすべてのセルビアの住民に対しては、国家共同体を危機から救いうる唯一の道であるこの偉大なる原則が勝利を収めるように、支援を表明されることを期待する[79]。

８月１日の決議は、農民・民主連合の主張がラジカル化したことを示した。それは第一に農民・民主連合が初めて国家制度の変更の要求を出した点で画期的な意味をもっていた。たしかにこの決議は「すべての諸地域の完全な対等・同権を保障する新しい国家制度を求める」と述べているだけで、その具体的な内容まで明らかにしていない。しかし、これまで現行憲法を前提として闘争を進めてきた農民・民主連合はこの立場を放棄し、国家制度の変更を第一にその改正を求める立場に転換したのである。これは結党以来ヴィードヴダン憲法の厳格な実行を主張してきた独立民主党が国家制度に関する綱領的立場を修正し、クロアチア農民党の立場に接近したことを意味した。もちろん、両党が描く将来の国家像にはなお大きな懸隔があり、それゆえ決議は漠然とした枠組みしか示せなかったが、農民・民主連合の運動が新しい段階に入ったことは明らかであった。

８月１日の決議で示されたもう一つのラジカルな主張は、セルビアの諸政党とは接触も交渉もいっさい拒絶するという立場である。彼らが協力を呼びかけた政党は旧オーストリア＝ハンガリー領の諸政党であり、セルビアでは農民大衆と諸個人にのみ支援を呼びかけただけで、いかなる政党も接触の対象外としていた。農民・民主連合は、セルビアの政党と話し合っても彼らが望む協定の成立は不可能だと確信するに至ったと強調した。農民・民主連合は７月末まではなお議会主義的な解決に期待に取り組んでいたが、与党四党の政権維持と議会の継続という事態を受けて、８月１日以降は政党間協議による解決にまったく期待をしなくなった。しかし、これは、ベオグラードの支配層との和解の可能性が客観的には大きく狭まったことを意味した。

なお農民・民主連合の呼びかけに応じて、８月２日、クロアチア農民党

と競合する勢力であったクロアチア・ブロックの二人の議員が農民・民主連合の議員クラブに加入した。一人はアンテ・トルムビッチであり、もう一人はアンテ・パヴェリッチであった。後者はクロアチア権利党の指導者であり、後にファシスト団体ウスタシを結成した人物である。これによって、農民・民主連合はクロアチア人のほぼ全政治勢力を結集させた[80]。

ところで、ステェパン・ラディッチは７月８日に医師団に付き添われてベオグラードからザグレブに汽車で戻った。途中、列車が駅に停車するごとに待ち受けた民衆が車両を取り囲んだ。ザグレブの中央駅ではさらに多くの市民が待っていた。ラディッチは車窓から人びとに挨拶したが、一般民衆との対話はこれが最後の機会となった。その後もっぱら自宅療養を続けたラディッチは、８月１日に農民・民主連合が採択した決議に署名したのが最後の仕事となった。彼は８月７日、危篤状態になった。ラディッチの治療のためにウィーンとミュンヘンからも著名な医師が呼ばれていたが、体力の衰えには対処のしようがなかった。ラディッチは８月８日夜に昏睡状態に陥り、その日のうちに息を引き取った。享年57歳であった。最期を見届けたヴラツコ・マチェックはこう叫んだ。「無冠のクロアチア王が死んだ」。検死をおこなった医師団は、心筋梗塞と糖尿病の合併症による心臓の衰弱を直接の死因とする所見を発表した[81]。ラディッチの葬儀は８月12日におこなわれたが、これにはパヴレ・ラディッチとバサリチェクの葬儀を上回る数の人びとが参列した。クロアチアの各地から参列者を運ぶため、９本の臨時列車がザグレブに向かったほどであった[82]。翌日、クロアチア農民党は新しい議長に副議長だったマチェックの昇格を決め、彼は同時に農民・民主連合の共同議長に就任した。

国民議会は８月13日に閉会となった。夏休みに入り、ベオグラード政府はクロアチア人の興奮が静まるのを待っていた。しかし、クロアチアの民族運動のシンボルであったラディッチの死によって、クロアチア人の怒りはいっそう高まった。議会の最終日に政府がネットゥーノ条約の批准を強行したことはクロアチア人の神経を逆撫でした。

８月１日に農民・民主連合が採択した決議はベオグラードの支配層には否定的に受け止められた。セルビアの主要政党の中には、野党の農業者党を含めて、国家制度の変更に賛成する者はいなかった。たとえば、民主党のダヴィドヴィッチは、友人に宛てた手紙の中で６月20日の事件の余韻が生々しい状況下では国家制度の変更はできないし、まして選挙の実行は不可能だと述べていた。また別の手紙では、個人的な犯罪をセルビア人全体に責任を負わせ、本来はクロアチア人と同じ民族を構成するセルビア人を別の文化と道徳規準をもつかのごとく主張する彼らの決議は、決して改革の基礎にはならないとも述べていた。しかし、民主党は1925年の党大会で「広範な地方自治の確立」を求め、これを達成するためには憲法の修正も提起するという路線を打ち出していた。それゆえ、民主党の指導部は農民・民主連合の決議が国家制度をどのように変更するのかを明らかにしていない点を疑問とし、この点を明確に示すように求めることで、対話の糸口を探ろうとする姿勢も示した[83]。

しかし、セルビアの与党の中には感情的な反発もあった。それは農民・民主連合の決議が、政権与党をセルビアによる優越支配の護持者と決めつけ、彼らとはいっさいの関係を持ちたくないとあからさまに述べていたからである。彼らの中には1918年12月の統一国家の樹立にまで難癖を付けるクロアチア人の態度に嫌気を感じる者もあり、非公式にではあるが次のような考えを述べる者もいた。「このようなプレチャニンとは別れた方がよい。クロアチア人が自分たちをそんなに憎んでいるなら、彼らに出て行ってもらった方が我々には好都合だ」。これはいわゆる「クロアチアの切り離し」論である。つまり、クロアチア人と政府に不満のあるセルビア人のプレチャニンが居住する地域を国家から分離し、彼らの好きなように任せるという考え方である。ベオグラードではその先例として1905年にノルウェーがスウェーデンから平和的に分離したことが指摘された[84]。

しかし、「クロアチアの切り離し」は、クロアチア人にとっても、クロアチアのセルビア人にとっても危険な議論であった。国境線をどのように引

くかという問題が含まれていたからである。クロアチア人が主張する歴史的に固有な地域とセルビア人が主張する歴史的に固有な地域は重なる部分があった。それゆえ、セルビアの支配層が欲するように国土が切り取られると、「大セルビア」が実現する一方で、クロアチア人には最小の地域しか与えられない恐れが大いにあった。その結果、クロアチア人も、クロアチアのセルビア人も二つの国家に分断されてしまう恐れがあった。それにユーゴスラヴィアから切り離されたクロアチアは隣国のハンガリーやイタリアの脅威にさらされ、最悪の場合には両国による分割併合の恐れがあった。

それゆえ、農民・民主連合の指導部は、直ちにこの議論に反論した。スヴェトザール・プリビーチェヴィッチは9月6日、ベオグラードの報道関係者との取材に応じて発言し、セルビアの諸政党だけで国家の切断をおこなうことができるのかと疑問を投げかけた。彼によれば、この国家は国際的な条約によって形成されたものであり、国際的な意味をもっている。したがって、その解体が内政上の問題だけにとどまるのか大いに疑問だと彼は述べた。ヴラツコ・マチェックは、自分たちの要求はあくまでも国家の内部の統治構造の変更であり、「クロアチアの切り離し」論には与しないことを強調した。彼は9月9日のザプレシッチの演説でこう述べた。「我々の望みは国家の解体ではない。我々はこの国家の外に出て行くつもりはない。ただクロアチア人はその土地の上では支配者にならなければならない」[85]。もっとも、「クロアチアの切り離し」論はクロアチア人の分離志向を牽制するためにこれまでも意図的に放たれたことのある議論であった。今回もまたそうであり、農民・民主連合の指導部がクロアチアの分離独立を明確に否定したため、政権内部で真剣に取り組まれるには至らなかった[86]。

## 6　「農民・民主連合」の闘争戦術とその結果

ベオグラードでは、裁判所が６月20日の犯行について、プーニシャ・ラチッチに対する審理を始めていた。検察側は急進党議員のトモ・ポポヴィッチと民主党議員のルーナ・ヨヴァノヴィッチに事情聴取をおこない、９月３日、この二人の議員の起訴を決めた。ポポヴィッチはステェパン・ラディッチを対象としたプーニシャ・ラチッチの殺人未遂の幇助、ヨヴァノヴィッチはイワン・ペルナルの殺人未遂の容疑である。同日ポポヴィッチとヨヴァノヴィッチは身柄を拘束された。ベオグラードでは、これで６月20日の事件を当初から「組織的な犯行と」と主張していた農民・民主連合の議員はいくらか満足するのではないかという観測が流れた[87]。

しかし、ザグレブとベオグラードとの没交渉の状態は改まらなかった。９月中旬、農民・民主連合は国民に向けたメッセージを発表したが、それは､「暴力と不平等に基づく現在の支配体制に責任を負う政府および与党の代表とはいかなる社会的なコンタクトも断つ必要がある」と述べ、国民議会での闘いは不可能になったので、農民・民主連合は別の形の闘いを選択せざるをえなくなったと宣言した[88]。

10月12日、ベオグラードの国民議会は定例会議を始めたが、農民・民主連合の議員はこれに参加しなかった。ザグレブでは10月19日、農民・民主連合の幹部議員が会合を開き、二日後に予定されている政治集会の打ち合わせをしていた。10月21日、シーサクで開かれた農民・民主連合の政治集会は５万人に近い参加者を集め、大成功を収めた。農民・民主連合の新議長のマチェックは、セルビアの支配層に対し自分たちがもつあらゆる手段で闘いを挑むと宣言した。もう一人の議長のプリビーチェヴィッチは、プレチャニンのセルビア人とクロアチア人との連帯を強調し、こう述べた。「人民の一体性を完全に支持するセルビア人はクロアチア主義の表出を喜ばなければならない。なぜなら、それはセルビア主義の別名だからだ。クロアチア主義の表出を邪魔するセルビア人はクロアチア人を支配しようと

するセルビア人だけだ」[89]。

ベオグラード政府は、農民・民主連合が成功を収め、多数のプレチャニンを動員したことに不快感をもった。６月20日の殺人事件以降、急進党と民主党がプレチャニンの居住地域で直面していた頭の痛い問題は、離党者の増加と地方組織の分裂であったからである。党組織の弱体化はこの秋に実施された地方議会の選挙結果に直ちに影響した。

10月27日、ボスニア・ヘルツェゴヴィナでは「オープチナ」と呼ばれる末端の地方単位の選挙が実施された。ボスニア・ヘルツェゴヴィナはセルビア人、クロアチア人、イスラム教徒のスラヴ人の混住地域だが、セルビアの支配層は強いなわばり意識をもっていた。しかし、選挙の結果、農民・民主連合は1111の議席を獲得した。これはユーゴスラヴィア・ムスリム機構1480、急進党1357に次ぐ議席数であった[90]。農民・民主連合は総議席数の23.2％を獲得し、これは前回の国政選挙の結果（クロアチア農民党と独立民主党で18.9％）と比べると大きな前進であった。これに対し急進党は後退し、首都のサラエヴォの議席ではムスリム機構11、クロアチア農民党７に対し、急進党は６と敗北を喫した。ベオグラード政府はこの結果にショックを受けた[91]。

農民・民主連合の躍進と急進党の後退は、11月18日にダルマチアのスプリットで実施された市議会選挙でもっと顕著に現れた。農民・民主連合は41議席中23議席と過半数を制したのに対し、急進党は２議席にとどまった。クロアチア連邦主義党も７議席を獲得した。注目すべきは共産党が名称を変えた共和主義労農同盟も７議席を獲得したことであった[92]。

ベオグラード政府の中には農民・民主連合に対して強権的措置の検討を提起する閣僚もいた。彼らが念頭に置いたのはいわゆるオブズナーナ（「国家保安法」）の適用である。農民・民主連合は1924年のクロアチア共和農民党と同じような政治路線を歩んでおり、シーサクの政治集会はこのことを如実に示しているというのが彼らの主張であった[93]。しかし、これとは逆に、急進党の中には農民・民主連合を政権に取り込むべきだという意見も

根強くあった。パシッチ派が根城とする党総務会は、農民・民主連合に対し、現在の政権への参加もしくは別の連立政権への参加を呼びかける書簡を送った[94]。ヴキチェヴィッチ派と距離を置く「中枢派」のミラン・スルシュキッチは10月下旬、もっと具体的な提案をプリビーチェヴィッチに提示した。国王の信任の厚い近衛隊長のペータル・ジフコヴィッチ将軍を首相とする内閣を形成し、スルシュキッチらとともに農民・民主連合がこれに参加するという案である。しかし、プリビーチェヴィッチはこれを断った[95]。

農民・民主連合はこの間、セルビアの諸政党とは交渉をしないという態度を頑なに維持した。ベオグラードの週刊誌『ヴレーメ』の特派員の取材に応えてマチェックが述べた言葉はセルビアの諸政党に対する彼らの態度をよく示している。「あちこちで何度も述べているように、もはやベオグラードとは話し合いはあり得ない。その理由はあそこにはヨーロッパ型の民主主義が前提とする政党がないからだ。ベオグラードで政党と呼ばれる集団はおしなべてただ一つの項目からなる綱領をもっている。それは権力である。セルビアではいかなる政党も政権に参加して初めてそれなりの数の議員を獲得できる。セルビアではいかなる政党も政権の座にいなければ多数の議員の獲得どころか、それなりの数の議員さえ維持できない。だとすれば一体どの政党と話し合いができるというのだろうか」[96]。

セルビアの諸政党との関係を断ち、議会のボイコットを続けた農民・民主連合は、その目標とする国家制度の変更をどのような方法で実現しようと考えていたのか。ここで重要な点は、農民・民主連合の指導部はあくまで合法的で穏健な方法によって闘争を導こうと固く決意していたことである。彼らは議会闘争を放棄したからといって、民衆を動員してラジカルな直接行動に訴えることは夢にも考えなかった。そのような行動を計画すれば、強権的取り締まりの口実を政権側に与えることになることは明らかであった。それゆえ、クロアチア農民党の指導部は支持者、とくに若者層に対し政府側への反抗を自制し、過激な行動に走らないように何度も訴えた。

農民・民主連合の指導部が念頭に置いていたもう一つの方法は、国民とならぶ「第二の憲法的ファクター（主権の担い手）」と呼ばれた国王の協力を得ることであった。実際それは彼らに残されていた唯一の方法であった。それに憲法上国王が有していた権限を考えれば、どのような解決策も国王の関与と承認がなければ実行に移されることはあり得なかった。もっとも、これまでの国王の政治的関与は政党間の協議を前提とし、これに承認ないし拒否を与えるという方法で実現されてきた。しかしながら、セルビアの諸政党との交渉を否定した農民・民主連合はこのような手順を踏むのではなく、国王の直接的関与を期待した。いいかえると、国家制度の変更に関して国王と直接的に協定を結び、これを国王がセルビアの諸政党に否応なく承諾させるというプロセスの実現を望んだ。

ベオグラードの諸政党の指導者はザグレブ側のねらいをよく承知していた。農民・民主連合の指導部が望む解決の手続きは、セルビアの諸政党の関与を最小限に抑え、場合によっては彼らの関与をまったく排除しようとするものであった。ベオグラードでは、６月20日の事件以来、国王は政党政治を否定し独裁制への移行を検討しているとの観測があり、現実的にもその可能性は排除できなかった[97]。もし国王が国家危機への直接関与をきっかけに独裁制の実行に踏み切れば、それはセルビアの諸政党にとっては最悪の結果となる。それゆえ、彼らはこのプロセスの実現を何としてでも阻もうとした。急進党や民主党は対話を拒む農民・民主連合の指導部の態度を非難したが、同時に何とかして彼らとの接触と交渉を実現したいとも考えていた。これから始まるかもしれない政治的ゲームの蚊帳の外に置かれないようにするためである。彼らの中に事あるごとに農民・民主連合に理解を示し、ザグレブに秋波を送る者がいたのはその表れであった。

ザグレブでは12月１日、新たな騒乱が発生した。この日は「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」の10回目の建国記念日であった。大聖堂の入り口の前ではザグレブ駐留部隊の将校と行政官が勢揃いし、カトリックの司祭による記念のミサが始まるのを待っていた。ところが、こ

のとき塔の上にいた二人の若者が二枚の黒い旗をバルコニーに掛けた。一枚には議会で殺人事件が起こった日である「1928年６月28日」と書かれ、もう一枚には統一国家の建国が宣言された日の「1918年12月１日」が書かれていた。若者は大きなクロアチア国旗を手にしていた。３枚の旗は塔から落ち、うち２枚が将校団の頭上に落下した。これを不快とした司令官のリュボミール・マティッチは将校らにこの場を立ち去り、東方正教会へ行くことを命じた。行政官もこれに追随した。二人の若者は直ちに警官によって取り押さえられた。警察署に連行される二人のあとをクロアチア人の若者が徒党を組んで行進し、まもなく衝突が発生した。その結果、警官の発砲により、一人が死亡、二人が重傷を負った[98]。

翌12月２日、農民・民主連合はパクラッツで大規模な政治集会を開いたが、集会が始まる前に事件が起こった。近郊の村から200人あまりのクロアチア人がパクラッツの会場へ向かっていたところ、オープチナ長官のサヴァ・コスティッチがクーニェヴァツという村で彼らに停止を命じ、武器を所持していないか憲兵隊に調べさせた。このあと彼らが丸腰であることを見たこの村の急進党員は途中で待ち伏せし、斧や鍬で襲いかかった。５人のクロアチア人が重傷を負い、10人あまりが軽傷を負った。それゆえ、この日の主要な演説者の一人のプリビーチェヴィッチは直接襲撃に加わった急進党支持者を強く非難するとともに、その背後にいるセルビアの支配層を、武力でプレチャニンに対する支配を維持しようとしていると批判し、こう述べた。「国家の力は武力によってではなく国民の満足に基づく。国民が満足しない帝国はいずれも崩壊した」[99]。

ベオグラード政府は12月５日、クロアチア人による抗議運動の取り締まりに消極的であったザグレブ行政区の知事ペータル・ズレラッツを更迭し、セルビア出身の現役の陸軍大佐であるヴォイン・マクシモヴィッチを知事代行に任命した。現役武官のマクシモヴィッチの指名によって、政府側は騒乱が起こった場合には武力による鎮圧も辞さない態度を示した。ところが、マクシモヴィッチは法律の定める長官の資格（法科の卒業で国家

試験に合格していること）を有する人物ではなかったため、農民・民主連合のメンバーが主導権を握るザグレブ行政区の行政委員会はこれを根拠として政府側の決定に激しく反発し、国家評議会に提訴をおこなった[100]。

もっとも、クロアチア情勢に対する与党側の態度は一枚岩ではなかった。与党の一角を占める民主党では、党首のダヴィドヴィッチが総務会で民主党はそのような措置は聞いていないと発言し、マクシモヴィッチの任命を支持しない態度を示した。これには背景があった。国王による独裁制への移行が現実味を帯びてくる中でダヴィドヴィッチら民主党指導部は、進むべき道はやはりザグレブとの協定しかないと判断し、何としても農民・民主連合の指導部とコンタクトをとりたいと考えていた。ダヴィドヴィッチは1928年11月の段階で重大な方針転換を決意し、これを伝える書簡を農民・民主連合の指導部に送った。８月１日に彼らが採択した決議を受け入れ、これを土台に交渉をおこないたいと申し出たのである。農民・民主連合の指導部はこれを大きな前進と評価したが、同時に何か政府に反対する行動をとるよう勧めた。これは民主党に「変化の証し」を求めたものであり、ダヴィドヴィッチはこれに応えようとした。マクシモヴィッチの任命の反対はその第一弾であった[101]。

ダヴィドヴィッチは農民・民主連合の信頼を得るため、政府に圧力をかけた。12月７日、彼は首相のコロシェッツに書簡を送り、その中で民主党が政権参加の際に求めた政策（農民の債務の清算、ダルマチアの農地改革、腐敗防止法の制定など）が何一つ実現していないことを批判し、民主党に何の断りもなくマクシモヴィッチの指名を決めたことに遺憾の意を伝えた。もっとも、これはコロシェッツにとっては言いがかりに等しかったはずである。なぜなら、ダヴィドヴィッチは民主党から起用された閣僚の存在と責任を無視していたからである。しかし、ダヴィドヴィッチは党の総務会と議員総会の支持を取り付けて独自の行動を推し進めた。彼は、それが最短の解決への道であるならば、この際農民・民主連合が求めた議会の解散と選挙の公示を認めてもよいと公式の場で発言した。ダヴィド

ヴィッチは12月27日の国王との会談ではザグレブとの話し合いと協定成立の条件を提起した。ここでダヴィドヴィッチは農民・民主連合の要求を満たすため、宮廷で検討されていた案よりもずっと広範な自治権を認める案を提出したといわれる[102]。

12月30日、ダヴィドヴィッチの圧力に堪えかねた首相のコロシェッツは内閣総辞職を表明した。彼は辞任の理由書の中でクロアチア農民党の要求は受け入れがたいと述べた。国王は1929年の年明け早々にコロシェッツの辞任を認め、政党指導者との政権協議を開始した。

宮内相のドラゴミール・ヤンコヴィッチはザグレブの農民・民主連合に電報を打ち、ヴラツコ・マチェックとスヴェトザール・プリビーチェヴィッチに1929年１月４日に宮廷に来るように求めた。マチェックは１月４日の11時に、プリビーチェヴィッチは16時に国王との謁見が設定されていた[103]。二人はこの招請を受け入れた[104]。

これは待ち望んだ機会であった。彼らは直接国王に危機の解決策を具申できるチャンスを得たと考えた。しかし、ここで注目すべきは二人が必ずしも一致した見解をもっていなかったことである。国王との謁見に当たり、マチェックは、現在の国家制度を根本的に改め、それぞれの地域の国家的および文化的歴史的な独自性を立法府と行政府を設置して確立することを要望した。これは実質的には連邦制の導入を意味していた。これに対し、プリビーチェヴィッチは憲法の改正を求めたが、具体的にどこをどのように変更すべきなのかを述べなかった。彼はそれを議会の仕事と考えていたようである。プリビーチェヴィッチは、憲法改正議会のための選挙を告示する内閣を直ちに形成するよう国王に求めた。さらに危機がいつもベオグラードで解決されるという見方を否定するため、国王はザグレブに来てそこから指揮を執るように提案した。翌日（１月５日）朝、マチェックは再び国王に呼ばれた。マチェックは前日と同じ見解を述べた上で、政党に所属しない人物による内閣を形成し、これに国王の信任を拠り所に断固とした態度で国家制度の変更（つまり連邦制への移行）を実行させるべき

だと提案した[105]。

マチェックとの話し合いが終わると、国王は急進党代表のアツァ・スタノエヴィッチに会い、次に民主党代表のリュバ・ダヴィドヴィッチに会った。国王は二人に国家制度に関するマチェックの提案を伝え、各党の意見を示すよう求めた。急進党は直ちに開いた議員総会でマチェック案を満場一致で否決し、これでは協議に応じることはできないと伝えた。民主党のダヴィドヴィッチはこの提案は受け入れられないが、もう一度話し合えばマチェックはこの案を撤回すると確信しているので、彼らとの話し合いは続けたいと国王に回答した。民主党の総務会もこの見解を了承した[106]。

1月5日夕刻、宮廷は次の声明を発表した。「政党代表者との協議の結果、現下の危機の解決策について各政党の間には相反する見方が存在することが明らかになった。しかもこの見解の相違は国家制度の問題の評価にも及んでいる。それゆえ、国家と国民の統一を完全に保証するような解決策は議会にはない」[107]。これは国王が向かう方向を予告するものであった。

1月6日、国王は公告を発表した。その中で国王は、「国民と国王との間に介在物を置いてはならないときが来た」と述べ、1921年6月28日公布の憲法の停止と1927年9月11日選出の国民議会の解散を通告し、これからは国王自身を唯一の立法者とし、法律は勅令の形式により制定すると宣言した。その上で国王は、すべての行政官ならびにすべての国民にこの決定に従って行動することを命じた。国王は近衛隊長のペータル・ジフコヴィッチ将軍を首相に任命し、自らが選任した閣僚からなる内閣を発足させた。このあと、国王は「国王権力に関する法律」と「新国家保安法」を公布した。前者は憲法に代わる法律であり、後者は既存のオブズナーナ（国家保安法）を強化した治安維持法である。国王はさらに「オープチナおよび行政区の自治に関する法律」を公布し、ベオグラード、ザグレブ、リュブリャーナを国王が行政府の首長と幹部行政官を任命する直轄地とした。

国民は第一報の段階では国王がとった措置を好意的に受け止めた。とくにクロアチア人は憲法の廃止と議会の解散を単純に喜んだ。なぜなら、ク

ロアチア人代表の参加なしに採択されたヴィードヴダン憲法は彼らにとって、セルビアによる支配と抑圧のシンボルだったからである。前年の６月にクロアチア人議員の殺傷の場になった国民議会の解散も待ち望まれていたことであった。国王はクロアチア人の願いをようやく聞き入れてくれた。彼らは最初そう考えたのである。このことは農民・民主連合の指導部も同様であった。マチェックでさえ国王は自分が提案した方向に進もうとしていると考え、「クロアチア人は自由なクロアチアの支配者となる」というクロアチア人の長年の理想の実現が近いと楽観的な期待を漏らしていた[108]。

だがこれは明らかに早とちりであった。国王が廃止したのは、言論、出版、集会、結社の自由といった憲法が保証していた市民的自由権だけであった。国王が矢継ぎ早に出した措置の意味を国民はすぐには理解できなかったのである。１月23日にはすべての政党に解散が命じられた。新しい内閣は国家制度の変更を提起することはなく、マチェックが求めた連邦制の導入はついぞ実現しなかった。

## ７　国王独裁制への道

国王が様々な法律を同時に発表したことから明らかなように、１月６日に宣言された国王独裁制はかなり以前から周到に準備されたものであった。１月４日と５日の政党指導者に対する意見聴取は単なる儀式にすぎなかったといってよい。本稿を結ぶにあたり、この国王独裁制への道を改めてたどり、なぜそれが易々と成就したのかを考察したい。

国王が最初に非議会主義的な解決策のアイデアを披露したのは、実は1928年の７月末に遡ることが明らかになっている。それはちょうどハジッチ将軍を首相候補者とする「政党から中立な政府」形成の試みが失敗に終わったときであった。国王は与党四党の代表者との会議の場で、「我が民族は10年経ってもまだ共通の伝統をもつに至っていない」と嘆き、「憲法上期

待されている調停者としての役割の外に出ることもあり得る」がどうかと発言した。国王はこれによって、政党間の利害の調停者ではなく、自らが政治的支配者となる案を示唆した。しかし、与党四党は、政党抜きに危機を解決しようとする国王の計画を受け入れる準備ができていなかった。国王もこのときは独裁制の導入は時期尚早とみて、コロシェッツに組閣権を与え、与党四党の政権を維持した[109]。しかし、彼は自らのアイデアを撤回したわけではなく、少し準備の期間をもとうとしただけであった。

他方、８月１日の決議で農民・民主連合は国家制度の変更を求める立場に転換したが、同時にセルビアの諸政党とはいっさい交渉をしないという立場を明確にし、自ら問題解決の可能性を狭くする道を選択した。農民・民主連合は議会闘争を放棄したとはいえ、民衆の動員や暴力的手段に訴える意思はまったくなかった。彼らはあくまで合法的・平和的な闘争しか考えていなかった。そうなると唯一の解決の道は国王の協力を得ることであった。それは、国王と直接に協定を結び、これをセルビアの諸政党に受け入れさせることであった。実際、国王が憲法上もつ役割と権限を考慮すれば、いかなる解決策も国王の承認なしには実現不可能であった。

しかし、このシナリオの実現には大きな障害があった。第一に農民・民主連合は国王と直接交渉をおこなうことはできなかった。国王との話し合いは、彼が求めた場合にのみあり得るだけであった。第二に国王は現在の憲法と国家制度の支持者であることは明らかであった。したがって、かりに国王との話し合いが実現したとしても、通常の状況では国王が農民・民主連合の要求を受け入れるとは考えられなかった。唯一考えられる可能性は、国王が彼らに譲歩を余儀なくされるような何らかの状況が発生することであった。たとえば、この国に影響力をもつ外国からの圧力である。しかし、それは有り体に言えば、黒船が到来するか、神風が吹くのを待つようなものであった。

それでも国際的ファクターの重要性を認識する農民・民主連合は、欧州諸国の世論および政府関係者に自分たちの主張を訴え、彼らの理解と支持

を得ようと機会あるごとに努力をおこなった。彼らはその際、ユーゴスラヴィアの問題の解決はヨーロッパ全体が関心をもつべき重要性があると注意を喚起した。農民・民主連合は主としてユーゴスラヴィアの友好国に働きかけをおこなった。なかでもこの国に大きな影響力をもつフランスとイギリスを重視した。しかし、これらの諸国はユーゴスラヴィアの安定性を求め、その現状の維持を支持していた。これに対して、農民・民主連合の代表は自分たちの要求はユーゴスラヴィアの解体ではなく、内部の国家制度の変更であることを強調した。諸外国が求めるユーゴスラヴィアの安定は国家制度の再編を実施しなければ保たれなくなっているというのが彼らの主張であった。もっとも、そうなると、それは主に国内問題であり、うかつな内政干渉を避けるために、諸外国はますます慎重な立場をとらざるを得なかった[110]。

国内では農民・民主連合は国王への信頼を表明し、彼が危機の解決に向けて直接的に行動を起こすのを待った。しかし、ベオグラードの国王はその気配を見せなかった。それゆえ、マチェックは10月21日にシーサクで開かれた政治集会でこう述べた。「亡くなった親愛なる議長（ラディッチ）はあの殺人事件のあと直ちに次のようなスローガンを作成した。『もはや何もない。法律もない。憲法もない。ここには国民と国王がいるだけだ。』しかし、友よ、兄弟よ、我々は目を大きく開き、耳を澄ませ、すでに３ヶ月いや４ヶ月も待ち続けているが、国王はまだ動かない。そうすると、思うに最後に残るのは国民だけになってしまう」。同様の口調でプリビーチェヴィッチもこう述べた。「６月20日の事件以来、我々は合法的手段による闘争を維持してきたし、これからもこの原則を守っていくつもりだ。しかし、この合法的手段によっては何の成果も得られないということになると、別の手段をも検討せざるを得なくなる。なぜなら、国民が国王陛下と呼ぶ方は世界でもっとも年長な方だからだ」[111]。しかし、彼らはこのように言葉の上で苛立ちを表明するのが精一杯であり、実際に何か行動を起こすことはなかった。

農民・民主連合の指導部はセルビアの諸政党とは交渉をしないという態度を貫いたので、状況は膠着状態が続いた。しかし、この均衡はベオグラードの方から破られることになった。1928年秋の地方議会選挙での敗北によって、急進党と民主党は次第に焦燥感を募らせた。この結果、彼らはもしかして農民・民主連合と国王との直接交渉が実現するのを恐れ、政権をめぐるゲームから排除されないように、農民・民主連合に競うように秋波を送り始めたのである。より強い危機感をもった民主党のダヴィドヴィッチは農民・民主連合の指導部に対し、８月１日の決議を交渉の土台として受け入れることを伝えるに至った。彼らの信頼を得るため、12月初めにクロアチアで起こった騒乱をきっかけにダヴィドヴィッチはコロシェッツ政権に強い揺さぶりをかけ、1928年末についにこれを辞任に追い込んだ。しかし、これは国王にとっては計画を実行に移すチャンスの到来を意味した。

1929年の年明け早々、国王は慣例にしたがって政党指導者からの意見聴取を開始したが、最初に宮廷に呼ばれることになったのは農民・民主連合の二人の代表であった。ザグレブの農民・民主連合の指導部は、彼らが望んだプロセスが始まるのではないかと密かに期待した。しかし、この期待には現実的裏付けがなかった。すでに述べたように、農民・民主連合の望んだプロセスが実現するには国王が彼らに譲歩を強いられるような状況を必要とした。ところが、状況はそれほど深刻ではないと国王は判断していた。それゆえ、彼は予定通り農民・民主連合に対して妥協のない措置をとることができた。農民・民主連合は国王が国家制度の変更に着手することを期待したが、国王による個人独裁制の準備は最終段階に入った。

実際、このとき国王には有利な要因がそろっていた。第一に農民・民主連合とは対照的に国王は同盟諸国の強い支持を取り付けていた。たしかに農民・民主連合は８月１日の決議によってラジカルな態度をとるようになったが、彼らのラジカル化は主として言論上のものだと国王は見ていた。それゆえ、国王はフランス政府関係者にこう説明し、彼らの不安を解

くことができた。「若干の緊張はあるが、クロアチアの状況は落ち着いており、その統治機構は大きな困難なく機能している。農民・民主連合の闘争は言論を主要な手段とし、直接行動を伴うものではない。クロアチア人は平和主義者で分離独立の行動をとる危険性はない」。第二に農民・民主連合がセルビアの諸政党とは交渉をしないという立場を貫いている限り、政党間協議による協定の成立はあり得ず、したがって、政党勢力の結束によって国王による権力掌握の計画が挫折させられることは考えられなかった。しかも、セルビアの諸政党の中には急進党と民主党の根深い対立があり、さらに両党はそれぞれ内部に深刻な派閥対立を抱えていた。それゆえ、コロシェッツ政権が倒れたあと、国王は政党間の意見対立を見越した上で政党指導者からの意見聴取にはいることができた。第三に国王は軍部を完全に掌握していた。以上のことから、国王は安心してその計画を実行に移すことができたのである[112]。

最後に農民・民主連合側の大きな問題として、国家制度を具体的にどのように変更するのかについて公式見解を詰め切れなかったことがある。農民・民主連合が８月１日の決議によって表明した和解の条件は、「すべての諸地域の完全な対等・同権を保障する新しい国家制度」への変更であったが、この決議は具体的にどのように国家制度を変更するのかについてはまったく触れていなかった。決議はそれをラディッチの復帰を待って具体的に決定をすると述べているだけだった。８月１日の決議が一般的な原則を掲げるにとどまったのはクロアチア農民党と独立民主党の両党が一致した国家像をまとめることができなかったからであった。

では両党は実際にはこれをどのように考えていたのか。決議が一般的な原則を掲げるにとどまったため、その具体的な解決策は様々な可能性があった。このため、クロアチア農民党の指導者間でさえ必ずしも一致した見解があるとはいえない有様であった。しかし、マチェックの見解を中心に最大公約数を抽出するとすれば、それは、現在の単一国家を立法府と行政府をもついくつかの自治単位からなる連邦国家に再編することだという

ことになるだろう。クロアチア農民党にとっては、これ以下の条件ではいかなる解決策もあり得なかった。

たとえば、マチェックは、ラディッチの死後一ヶ月後の演説でこう述べた。「我々の望みは国家を壊すことではない。我々は国境の外に出ることはしない。しかし、この国家の境界の中では、クロアチア人はクロアチアの土地に対する唯一の支配者とならなければならない。それは自分の家と土地に対する支配者になるのと同じだ。クロアチア人は自前の議会と行政府を持たなければならない。我々は国家に共通の仕事を持つことになるが、この仕事においてはあらかじめ対等平等が完全に保証されなければならない。決してこの10年間のように少数者が多数者を支配するということがあってはならない」[113]。

マチェックが連邦制の導入を明確に求めたのに対し、単一民族と単一国家の確立を党是とする独立民主党のプリビーチェヴィッチはいくらクロアチア農民党との共闘を重視していたとしても、決して連邦制国家に同意するまでは至らなかった。彼の考えはせいぜい「地方自治権の確立」のレベルにとどまったようである。

たとえば、1928年12月のことであるが、プリビーチェヴィッチは連邦制を主張するようになったとある外国雑誌（『ノイエ・フロイエ・プレス（新しい自由報道）』）が報道したとき、プリビーチェヴィッチはこれを党の機関誌で否定してこう述べた。「私は連邦制国家について語っていない。私は、我々の目的は連邦制の導入だと述べたことは一度もない。我々が求めるのは対等同権である。そのもとでは、あらゆる地域とあらゆる部分の国民が全体国家に不可欠ではない事項について完全に自律的に意思決定をおこなうことになる」。これに続けてプリビーチェヴィッチはこう述べた。「我々の国家制度はまったく新しい基礎の上に再編成されなければならない。新しい国家は、完全な対等同権を保証する構造に変えられねばならない。それがどういう名称で呼ぶのがふさわしいか、連邦制と呼ぶべきか、広範な自治と呼ぶべきか、それは学問上の問題である。問題は形式ではな

く、中身である。我々はこの問題について何も結論を出していない。時が来れば必要な結論を出すことになるだろう。しかし、現時点ではまだそれは必要ではない」[114]。

このように独立民主党の指導者は決議が掲げた原則をどのような国家制度で実現するのか明確に述べることはなかった。これはクロアチア農民党の指導者との大きな相違である。プリビーチェヴィッチらは決議が掲げた原則を繰り返すにとどまり、問題の細部に言及することを避けた。これは何よりもクロアチア農民党と独立民主党との見解の相違が浮き彫りになるのを回避しようとしたためであるが、もう一つの要因として独立民主党の内部にも見解の不一致があり、党の団結を保つためその表面化を避けようとする配慮が働いたからでもあった[115]。党首のプリビーチェヴィッチにとって、８月１日の決議ではっきりしていることは憲法を修正することであった。彼はこの点は一点の曇りもなく、繰り返し言及した。しかし、憲法のどこをどう修正すべきなのかを明らかにすることは常に躊躇した。

とはいえ、以上で見たことからも明らかなように、マチェックとプリビーチェヴィッチの間には疑いなく求める国家像に相違があった。プリビーチェヴィッチは憲法修正と地方自治権の拡大の点まではマチェックに接近できても、独立民主党の綱領である単一国家主義を否定することになる連邦制の導入には同意できなかった。両者の国家像の隔たりはクロアチアのクロアチア人代表とセルビア人代表の見解の相違といってもよいだろう。そうすると、ベオグラードの国王が百歩譲って国家制度の変更に同意したとしても、そのあとどのようにこれを具体化するかをめぐって両者の間で争いが起きる可能性は大いにあった。農民・民主連合が求めた国家制度の変更はこの点でまだ実現の条件が熟していなかった。これもまた国王による個人独裁制導入計画の成就を容易にした要因といえよう。

## 注

1　以上、Branislav Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1979, p.234。なおかつてスロヴェニア人民党はスロヴェニアの行政区に立法権を求めていた。しかし、この政権協定によって、コロシェッツはこの要求を取り下げ、自治権の拡大で満足することにした。

2　Ibid., p.234.

3　たとえば、パヴレ・ラディッチは投石にあって頭部と顔面を負傷し、アウグスト・コシュティッチはスコピエで憲兵に捕まえられて、列車に押し込まれ、ベオグラードに送還させられた（Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, Školska Knjiga Zagreb, 1992、Rudolf Horvat, p.348, Hrvoje Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999, p.225）。

4　Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.352.

5　地盤とするセルビアでは、17の選挙区うち15の選挙区で急進党は複数の候補者名簿を提出し、中には3ないし4つの候補者名簿を提出した選挙区もあった（Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.237）。

6　民主党も急進党と同じく党内対立があり、ヴキチェヴィッチ内閣に入閣しているマリンコヴィッチのグループと党首のダヴィドヴィッチを中心とするグループに分裂していたが、両派は相討ちを避けて複数の候補者名簿を提出することをしなかった（ibid., p.237）。

7　ただし、クロアチアの首都ザグレブでは、ザグレブにより多くの税負担を求めた行政区議会でのラディッチの路線が有権者の反発を招いて、クロアチア農民党は惨敗し、クロアチア・ブロックは2議席を独占した。その一人はクロアチア連邦党のアンテ・トルムビッチであり、もう一人はクロアチア権利党のアンテ・パヴェリッチであった。後者はのちにウスタシの指導者となった人物である。

8　これにはもう一つの要因として、マケドニアとサンジェクのアルバニア人やトルコ人を支持基盤とするジェミエット党が党首の逮捕のために候補者名簿を提出できなかったという事情があった（ibid., p.238）。

9　モンテネグロの選挙区ではモンテネグロ連邦主義党が後退し、急進党は議席は1議席増の3議席を獲得した。このとき新たに当選した三番目の候補者こそが翌年の6月、国民議会でピストルを発射してクロアチア農民党議員を殺傷したプーニシャ・ラチッチであった（ibid., p.238）。

10　Branislav Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, Institut savremenu istoriju, Beograd, 1970, p.488.

11　両者の会談は、ベオグラードの国民議会の建物の中でおこなわれた。この日の午前中、ステェパン・ラディッチは独立民主党の議員クラブの部屋を訪ね、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチと小一時間話し合った。会談を終えて部屋から出たラディッチは待ち受けていた記者たちにこう語った。「これはまだ序曲にすぎない。オペラはあとに控えている。二人の古い友人が再会し、新しい仲間になった」。ラディッチとプリビーチェヴィッチの間に戦術の違いはないのかという記者からの問いに対して、ラディッチは「我々の間にはまったく戦術の相違はない」と答えた。プリビーチェ

ヴィッチはラディッチとの会談についてこう述べた。「我々は共同の仕事を語り合った。若い頃一緒に仕事をした二人の男が今日再会し、この国に文明を確保するために一緒に働こうと語り合った」。同日午後、今度はプリビーチェヴィッチがクロアチア農民党の控え室を訪ね、ラディッチと話し合った。以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.361、Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.233、Hrvoje Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p.192、による。

なお興味深いのは、事前の打ち合わせでプリビーチェヴィッチは、ラディッチが先に独立民主党の控え室を訪問することを求め、ラディッチがこれを承諾したことである（ibid., p.192）。政党の規模や議員数からいえば、独立民主党よりもクロアチア農民党の方がずっと大きかったので、プリビーチェヴィッチが先にラディッチを訪問してもおかしくはなかった。ラディッチがあえてプリビーチェヴィッチの顔を立てたことには、名を捨てて実を取ろうとした判断があった。すなわち、ラディッチの戦略はセルビアを孤立させ、包囲網を敷くことであり、そのためにはベオグラードの政権を強化しかねない独立民主党と民主党の合同計画を挫く必要があった。したがって、ラディッチはこの交渉がまとまらないうちに独立民主党を自陣営に取り込んでおいた方がよいと考えた。ラディッチはプリビーチェヴィッチとの会談を通し、クロアチア農民党と独立民主党の両党はこの先単独ではどのような政党の組み合わせにも加わらないことで合意し、これによって独立民主党は民主党と合体しないとの言質をプリビーチェヴィッチから取り付けた。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.489-490による。

12　Ibid., p.489.

13　Ibid., p.489、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.192.

14　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.490-491.

15　Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.492.

16　以上、ibid., p.492、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.246。なおこの直後にも民主党は、国民議会の審議の過程で野党との協力関係を築く機会は何度かあった。一つは、10月26日にクロアチア農民党代表が選挙妨害を理由にヴキチェヴィッチの問責決議案を出したときである。民主党はこの年の２月に前内相のマクシモヴィッチの問責決議案を提出しており、このたびの選挙では野党と同様に急進党側からの選挙妨害の被害に遭っていた。それゆえ、クロアチア農民党と農業者党はこの機会に民主党が反ヴキチェヴィッチの姿勢を示すことを期待した。ところが、民主党は採決に際し反対票を投じ、この決議案の却下に一役買った。もう一つの機会は、11月４日にクロアチア農民党が政府に対し、３日の期限を区切って「直接税に関する法律」案の提出を求める提案を議会でおこなったときである。この法律の制定は与党の公約に含まれていた基本政策の一つであり、民主党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、スロヴェニア人民党も選挙運動の期間にはその実現に力を尽くす

ヴィッチはラディッチとの会談についてこう述べた。「我々は共同の仕事を語り合った。若い頃一緒に仕事をした二人の男が今日再会し、この国に文明を確保するために一緒に働こうと語り合った」。同日午後、今度はプリビーチェヴィッチがクロアチア農民党の控え室を訪ね、ラディッチと話し合った。以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.361、Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.233、Hrvoje Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, Hrvatska Sveučilišna Naklada, Zagreb, 1995, p.192、による。

なお興味深いのは、事前の打ち合わせでプリビーチェヴィッチは、ラディッチが先に独立民主党の控え室を訪問することを求め、ラディッチがこれを承諾したことである（ibid., p.192）。政党の規模や議員数からいえば、独立民主党よりもクロアチア農民党の方がずっと大きかったので、プリビーチェヴィッチが先にラディッチを訪問してもおかしくはなかった。ラディッチがあえてプリビーチェヴィッチの顔を立てたことには、名を捨てて実を取ろうとした判断があった。すなわち、ラディッチの戦略はセルビアを孤立させ、包囲網を敷くことであり、そのためにはベオグラードの政権を強化しかねない独立民主党と民主党の合同計画を挫く必要があった。したがって、ラディッチはこの交渉がまとまらないうちに独立民主党を自陣営に取り込んでおいた方がよいと考えた。ラディッチはプリビーチェヴィッチとの会談を通し、クロアチア農民党と独立民主党の両党はこの先単独ではどのような政党の組み合わせにも加わらないことで合意し、これによって独立民主党は民主党と合体しないとの言質をプリビーチェヴィッチから取り付けた。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.489-490による。

12　Ibid., p.489.

13　Ibid., p.489、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.192.

14　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.490-491.

15　Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.492.

16　以上、ibid., p.492、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.246。なおこの直後にも民主党は、国民議会の審議の過程で野党との協力関係を築く機会は何度かあった。一つは、10月26日にクロアチア農民党代表が選挙妨害を理由にヴキチェヴィッチの問責決議案を出したときである。民主党はこの年の２月に前内相のマクシモヴィッチの問責決議案を提出しており、このたびの選挙では野党と同様に急進党側からの選挙妨害の被害に遭っていた。それゆえ、クロアチア農民党と農業者党はこの機会に民主党が反ヴキチェヴィッチの姿勢を示すことを期待した。ところが、民主党は採決に際し反対票を投じ、この決議案の却下に一役買った。もう一つの機会は、11月４日にクロアチア農民党が政府に対し、３日の期限を区切って「直接税に関する法律」案の提出を求める提案を議会でおこなったときである。この法律の制定は与党の公約に含まれていた基本政策の一つであり、民主党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、スロヴェニア人民党も選挙運動の期間にはその実現に力を尽くす

ことを有権者に約束していた。ところが、これら三党はこの提案を支持しなかった。このほか、外交問題に関する委員会の設置を求めた議会規程の改正案、農民の債務の清算に関する法律などクロアチア農民党が提案した議案に民主党はことごとく反対票を投じた。以上、ibid., pp.245-246。

17　彼らの決議はこう述べた。「クロアチア農民党と独立民主党は農業者党とともに民主同盟に対して民主主義勢力を統合するため合同会派の結成を呼びかけた。この提案は原則的には受け入れられながら、政治戦術上の理由から未だ実現されるに至っていない。そこで、クロアチア農民党と独立民主党の両党は10月22日に民主同盟に提案した行動計画に基づいて『農民・民主連合』を結成し、民主主義ブロック形成に向けて大きな第一歩を踏み出すことにした」(Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.362)。

18　以上、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.194。なおこの申し合わせによって独立民主党と民主党との合同の可能性は完全に消えた。

19　同時代のジャーナリストであったヨシプ・ホルヴァートは、この国の建国以来、ラディッチとプリビーチェヴィッチの和解ほど人びとを仰天させ、当惑させた政治的事件はなかったと書いている（Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, August Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990,pp. 328-329)。

20　農民・民主連合が結成された日の夜、クロアチア農民党と独立民主党の議員は夕食会を開いた。乾杯の音頭をとったラディッチはこう述べた。「私とプリビーチェヴィッチは30年前に一緒に仕事をした仲だが、その後に袂を分かった。これはよい経験だった。なぜなら、もしあのまま共に仕事を続けていたらいまこのような関係になることはなかっただろうと思うからだ」。プリビーチェヴィッチはこう返答した。「これまでベオグラードでは、『ラディッチと組んでプリビーチェヴィッチを叩く』か『プリビーチェヴィッチと組んでラディッチと闘う』といった手法がとられてきた。これからはそんなことは不可能になった。だから彼らに聞かせたい。我々はこの国の政治に参加したい。我々は未成年者ではなく、この国の共同所有者である」（Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.236)。

21　詳しくは、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.363-364を参照。

22　以上、ibid., p.364。

23　以上、ibid. pp.366-367。

24　Ibid., p.370.

25　１の政権参加の問題については、ダヴィドヴィッチ支持の急先鋒であるミルティン・スタンコヴィッチは反議会主義的な政権からの離脱を求め、民主党はこのような反動的な政権に奉仕するよりは野党と連合し、広範な国民運動を組織すべきだと主張した。２の党内機関の意思決定のあり方については、議員総会が党の方針を決定していることは容認できないとし、総務会は議員総会に総務会のメンバーが投票権をもって出席することを決定した。３の農民・民主連合との関係については、民主党の政権参加が批判の的になり、政権からの離脱が求められた。プレチャニンの連合戦線の形成は国益を損ねており、これはそれが形成された原因を除去して初めて解体させることができる。その意味で民主党は原則的な考えの表明ではなく、行動を起こすことが求められているという意見が提出された。以上、Gligorijević, Demokratska stranka

i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.496。

26　以上、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.246。

27　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.374。

28　以上、ibid., pp.374-375。

29　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.500-501。

30　以上、ibid., pp.501-502。

31　Ibid., p.504.

32　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.377。

33　以上、ibid. p.377。

34　以上、ibid. p.378。

35　以上、ibid. p.378。

36　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.507。

37　以上、ibid., pp.507-508。

38　Ibid., p.508.

39　Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.200.

40　この間の政権交渉の過程で農民・民主連合は、連立政権が実行すべき19項の基本政策をまとめていた。その主要なものは、徴税に関する法律の改正、憲法の規定に沿った地方自治の確立、行政区の区割りの変更、クロアチア人とスロヴェニア人の政府機関（監査機関、国家評議会、人民銀行、商工銀行、外交機関など）への対等な登用であった。これらはいずれも民主党の主張とも重なる政策であった。また国家制度の変更に関する要求は一つもなく、あくまで現行の憲法の枠組みの中での要求であった。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.507。

41　Ibid., p.509.

42　それゆえ、プリビーチェヴィッチはのちにラディッチを弁護し、民主党の政権参加を表明したダヴィドヴィッチの２月16日の声明を念頭に、こう述べている。「ダヴィドヴィッチがあのような声明をおこなわなければ、ラディッチは決して軍人政権など進言しなかっただろう」（ibid., p.509）。

43　その一つの証拠は、民主党の閣僚が辞表を提出した２月初旬の国民議会での投票行動である。ヴキチェヴィッチは徴税に関する法案の上程を理由になお首相の座に居座っていたが、彼らはこの法案を否決することでヴキチェヴィッチを不信任とすることができた。ところが、ダヴィドヴィッチが反対票を投じることを呼びかけたにもかかわらず、民主党の議員総会は自由投票を決めた。実際にも民主党議員の多くは賛成票を投じ、法案を成立させるとともにヴキチェヴィッチ政権の延命を助けた。これはラディッチを失望させた。以上、ibid., p.504。

44　プリビーチェヴィッチが後に語ったところによれば、政権交渉の過程で農民・民主連合が財務相や内相、外相などの重要な閣僚ポストを求めたことを、ダヴィドヴィッチは過大な要求だと反発していた。それゆえ、プリビーチェヴィッチは民主党を含め

てセルビアの政党にとっては農民・民主連合はあくまで補完勢力であって対等な交渉相手ではなく、それゆえ、彼らはもともと農民・民主連合の要求を満足させる意思はなかったのだと解釈した。以上、ibid., p.510。

45　しかも61人中56人がセルビア人であった。

46　これを象徴的に示すのが第二次ヴキチェヴィッチでダヴィドヴィッチの側近であるミラン・グロルが教育相として入閣したことである。

47　Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.243、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.249.

48　議長のペリッチは、ラディッチが国王の名を不適切な場で用いたことを懲戒処分の理由とした。すなわち、ラディッチはこう述べた。「我が国は裁判所を監獄の下に置いている。これは事実上国王を監獄に入れているのと同じだ。この手続きによって、我が国家はそれ自体が監獄になっているからだ。この状態が続けば、監獄を国王にすることになる」（ibid. p.401）。

49　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.379-380。

50　以上、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.253。

51　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.381-382。

52　Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, p.253.

53　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.516。

54　以上、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, pp.254-256。

55　Ibid., p.256.

56　Ibid., p.256, p.401.

57　以上、Matković, Svetozar Pribičević: ideolog-stranački vođa-emigrant, p.204。

58　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.385。なお４番目の「アドリア・ドナウ河畔」行政区とは、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアに加えて、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、ヴォイヴォディナ、およびスロヴェニア以外のすべてのプレチャニンの居住区を含むとする広大な行政区であった。

59　以上、Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.245。

60　以上、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, pp.253-254。

61　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.386-387。

62　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.517。

63　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.387。

64　以上、ibid., pp.387-388、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.337。

65　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.388、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.337。

66　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.389、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.342。

67　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.389、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, pp.342-343。
68　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.390-391。
69　以上、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.346。
70　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.391、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.344、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.206。
71　以上、Svetozar Pribičević, Diktatura kralja Aleksandra, Globus, Zagreb, 1990, pp.61-62。
72　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.394。
73　以上、ibid., p.394。
74　以上、ibid., pp.397-398。
75　以上、ibid., pp.398-399。
76　以上、Gligorijević, Parlament i političke stranke u Jugoslaviji 1919-1929, pp.262-264。
77　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.405。
78　以上、ibid., pp.405-406。
79　以上、ibid., pp.406-407。
80　クロアチアで一定の勢力を有していた民主党は6月20日の事件後、組織の分裂とクロアチア人党員の離党が相次いだ。民主党の離党者の中には農民・民主連合の支持に転じる者も多かった。これを評してプリビーチェヴィッチは、「民主党はクロアチアでは完全に消滅した」と述べた。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.518-522。

　トルムビッチとパヴェリッチの農民・民主連合への参加について、プリビーチェヴィッチは、独立民主党はこの件を完全に承認しているというコメントを記者に述べた。独立民主党の機関誌はこれを「農民・民主連合の戦線はますます拡大している」との見出しで紹介した（Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.212）。しかし、トルムビッチは連邦主義者であり、パヴェリッチに至ってはクロアチア主義の立場からクロアチアの分離独立をも主張する人物であった。したがって、このような人物の参加を歓迎するプリビーチェヴィッチの態度は、単一国家と単一国民の確立を党是とする彼の党のメンバーから見れば、ややナイーブに映るものであった。この点は後に独立民主党のメンバーから「誤った寛容さ」と批判の声が上がる一因になったように思われる。
81　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, pp.411-412。
82　以上、ibid., p.412。
83　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.527-528。
84　以上、ibid., p.415。
85　Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu、ibid., p.416。
86　今回の事件のあと真っ先に「クロアチアの切り離し」を口にしたのは国王であった。

それはちょうどステェパン・ラディッチがベオグラードでの治療を終え、ザグレブに戻ることが決まったときであった。ベオグラードではラディッチがザグレブに戻るとクロアチアは独立か自治を宣言するのではないかという観測が浮上した。そのため、クロアチアの動きを牽制するため、国王は7月7日に諸政党の指導者を集めた会議の場で、連邦制を導入するくらいならクロアチアの分離を認めたいと述べた。これに対し、国王との謁見に際しプリビーチェヴィッチは、農民・民主連合の要求はユーゴスラヴィアの国境を越えるものだとの見方をきっぱりと否定した。以上、Svetozar Pribičević、Diktatura kralja Aleksandra, Globus, Zagreb, 1990, pp.65-66。

87　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.417。

88　Ljubo Boban, Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, Liber, Zagreb, 1974, p.30.

89　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.420。

90　選挙の結果をまとめると、各党の獲得議席は、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構1480、急進党1357、クロアチア農民党839、農業者党597、農民・民主連合182、独立民主党90、クロアチア大衆党23、労働者党17、社会党7、ユダヤ党7、クロアチア農民党とユーゴスラヴィア・ムスリム機構の合同名簿7、その他136であった（ibid., p.421）。

91　以上、ibid., p.421。

92　以上、ibid., pp.421-422。

93　以上、ibid., pp.420-421。

94　Lazar Marković、Jugoslavenska država i hrvatsko pitanje (1919-1929), Beograd, 1931, p.370.

95　以上、Svetozar Pribičević、Diktatura kralja Aleksandra, Globus, Zagreb, 1990, pp.87-88。

96　Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.30.

97　国王はすでに1928年7月の時点で憲法を停止し、独裁制に移行する考えを与党指導者に打診していた。それはハジッチ将軍を首相とする「政党から中立的な政府」の形成が与党の抵抗によって挫折したときであった。しかし、このときは与党四党の指導者の強い反対に遭い、時期尚早と見た国王はこのアイデアに固執しなかった。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.542。

98　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.422。

99　以上、ibid., pp.422-423。

100　以上、ibid., p.423。

101　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.529-530, p.543。

ところで、国王は1928年10月にフランスを訪問したが、これに関連してベオグラードの日刊紙『プラウダ』は二つの注目すべき記事を発表した。一つは「外国から見た我が国の政局の行方」という見出しの記事であり、ユーゴスラヴィアの国王はすべての事項に最終決定権をもち、国政の基本的な方向を決めていると諸外国は見ていると

述べるものであった。もう一つは、「国王の仕事」と題する記事であった。それは、ベオグラードとザグレブの破壊活動によって国家が危殆に瀕していると述べた上で、「最近国民にとって明らかなことはその破壊的闘争によって国を台無しにしている職業的政治家に代わって国王がその役割を果たすときが来ていることだ。国王自らが仕事に乗り出せば、我が国の議会の活動はいったん清算し、正常なものに回復させる必要があることも明らかだ」と述べた。以上、Matković, Povijest Hrvatske Seljačke Stranke, p.280。

上記の『プラウダ』は国王の側近の政治家ヴォヤ・マリンコヴィッチの経営する新聞だった。そこにこのような記事が掲載されるということは、国王の独裁制の接近を暗示していた。数日後にはイギリスの『タイム』の特派員は、ユーゴスラヴィアにはムッソリーニかピウツキーあるいはプリモ・ド・リヴェラのような人物が必要であり、国王はそのような人物としてペータル・ジフコヴィッチ将軍をすでに見いだしていると述べていた。以上、ibid., p.280。『タイム』の予想は当たっており、翌年早々に国王が独裁制を宣言したとき、首相に指名したのはジフコヴィッチであった。

102　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, pp.543-544。ダヴィドヴィッチは議会の解散と選挙の実施を認める発言をしたが、このとき農民・民主連合のマチェックは選挙の実施にたいした意味を認めず、危機の解決の場として議会を考慮に入れない立場に立っていたといわれる。なぜなら、選挙の結果、農民・民主連合が多数派を獲得できず、セルビアの諸政党が結束して国家制度の変更に反対すれば現状は何も変わらないことになってしまうからであった。以上、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.33。そうすると、マチェックにとって、農民・民主連合がダヴィドヴィッチに送ったエールは戦術的なもの以上のものではなかったことになる。

103　以上、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.223。

104　ただし、農民・民主連合は6月20日に殺人事件の舞台となった国民議会をボイコットし、8月1日にその議決機関としての正当性を認めない立場を表明していた。したがって、論理的にはこの議会の危機を解決するための協議に参加することはできない立場にあった。それゆえ、彼らは返信の電報にこう書き添えた。「農民・民主連合の議長は、国王陛下が国家の危機を直接的に解決しようとされるときに国王との接触を欲しなかったと批判を受けないようにするため、この陛下からの招請に応じることを決定した」。以上、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, p.359、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.32。

105　以上、Josip Horvat, Politička Povijest Hrvatske 2, pp.359-360、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.223。

106　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu,p.424、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.530。なおこのあと国家法を専門とする大学教授のスロボダン・ヨヴァノヴィッチが宮廷に呼ばれた。国王は政党を背景としない中立の政府の組閣を彼に指示するのではないか。ベオグラードの新聞記者と政治家はそう憶測したが、国王はただ専門的な助言を求めただけだった。以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.424。

107　以上、ibid., p.424。

108　以上、ibid., p.427。

109　以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.542。

110　８月１日決議以降の農民・民主連合の国際活動を概観すると、まず1928年８月23日にベルリンで開かれた国際議会連盟の大会があった。これは世界37カ国からの議会代表517名が参加した大規模な国際会議であった。ユーゴスラヴィアの議会代表は６月20日の事件の前に決まっており、農民・民主連合からは、ステェパン・ラディッチ、ユーライ・クルニェヴィッチ、スヴェトザール・プリビーチェヴィッチの３名が選ばれていた。しかし、農民・民主連合は６月20日の事件によって議会をボイコットしていたため、クルニェヴィッチとプリビーチェヴィッチはユーゴスラヴィア代表団への参加を拒否した。ところが、農民・民主連合の指導部はベルリンに出発したユーゴスラヴィアの代表団に対して対抗策をとらなければならないと考え、マチェックとクルニェヴィッチはクロアチア農民党の名で国際議会会議の執行部に電報を打った。その中で、彼らは６月20日に議会で起こった殺人事件を理由にベオグラードの議会の代表団にクロアチア人の議員が参加しなかったことを説明した。それだけでなく、６月20日の事件以降、ベオグラードの議会はクロアチアおよびクロアチア人を代表する集団ではなくなり、そのような不正常な議会から派遣されたユーゴスラヴィアの代表団はこの会議に参加する資格を欠いていると彼らは訴えた。このあとクルニェヴィッチは単独でベルリンに出発した。国際議会連盟の執行部はマチェックらの提起した問題を検討したが、ベオグラードからの代表団の参加資格を否定することはできないこと、ならびに一つの国からは一つの代表団しか参加できないという結論を出した。これによってクルニェヴィッチは公式に会議に参加する資格を認められなかった。クロアチア農民党は、ベオグラード議会の代表団の資格を無効にし、クロアチア議員の単独参加を認めさせることはできなかったが、ユーゴスラヴィアで起こっている問題に関して国際的関心を喚起することには成功した。クロアチア農民党が送った電報やクルニェヴィッチの会見はヨーロッパの新聞で報道され、反響を呼んだからである。クルニェヴィッチは個人的に他国の議会代表に６月20日に議会で起こった殺人事件を生々しく説明し、農民・民主連合の抗議行動に対する支援を求めた。これは他国の議会代表の中に驚きと同情を喚起し、クルニェヴィッチの活動は一定の成果を収めた。

　1928年10月末、マチェックらクロアチア農民党の代表団は中欧諸国の農民政党の代表者会議に出席するため、プラハを訪問した。チェコスロヴァキアはユーゴスラヴィアと同盟関係を結んでいた国であったので、その政権関係者はユーゴスラヴィアの問題に大きな関心をもっていた。マチェックらの訪問はこの国の新聞では大きく報道されたが、政府関係者からは期待した支援を得ることができなかった。チェコスロヴァキア政府の関係者はユーゴスラヴィアとの同盟関係に配慮し、ザグレブとベオグラードとの紛争に立ち入ることを避けた。これには、マチェックに招待状を送ったチェコスロヴァキア農業党の党首で閣僚のミラン・ホッジャがベオグラード政府から強い抗議を受けていたことも影響していた。プラハでは、マチェックはイギリスの労働党党首のマクドナルドとの会談のチャンスがあった。しかし、これにユーゴスラヴィア政

府がロンドンの外交代表を通して介入し、イギリス政府はマクドナルドにマチェックと会わないように勧告した。プラハからの帰途、ウィーンでマチェックはハンガリー政府代表のアポール男爵と会談した。この会談はアンテ・パヴェリッチ（後のウスタシ総統）がセットしたものだった。第一次世界大戦で失った領土の回復をねらうハンガリー政府はユーゴスラヴィアの弱体化を望んでおり、クロアチア人野党との関係樹立に大きな関心を抱いていた。しかし、ハンガリーはユーゴスラヴィアの仮想敵国であり、その政府代表との会談は余計な憶測を呼びかねないものであった。

農民・民主連合を代表し、もっとも広範な外交活動をおこなったのは新しく連合に加わったアンテ・トルムビッチであった。第一次世界大戦中にユーゴスラヴィア委員会を結成し、南スラヴ人の統一国家の形成をめざして連合国の中で活発なロビー活動を展開したトルムビッチは各国の政府関係者と豊富なコネクションを有することから外交活動には最適の人物であった。彼は1928年10月から12月にかけてパリとロンドンを往復する生活を送った。パリでは接触した人びとに対し、トルムビッチはユーゴスラヴィアの情勢を悲観的に語り、セルビア人とクロアチア人の対立が問題なのではなく、旧セルビア王国人と旧ハプスブルク領人（プレチャニン）という地域的な対立が問題であることを強調した。彼は、問題の解決策は国家の連邦制化であり、それが受け入れられない場合にはユーゴスラヴィアは共通の国王を媒介にした国家連合の形態が解決策になると訴えた。パリではトルムビッチは外務次官と二人の司令官と会うことができたが、外相とは会うことはできなかった。ちょうど同じ時期にユーゴスラヴィアの国王アレクサンダルがパリに滞在していたからである。アレクサンダルはフランスでは政府関係者の大きな信任を得ていた。それゆえ、トルムビッチと面会した要職者はユーゴスラヴィアの野党の主張に関心を示したものの、他国の政府と野党との関係にフランス政府が直接的な介入をすることには反対であり、もっぱら国王による善処を期待するだけであった。

ロンドンではトルムビッチはパリ以上に歓迎されなかった。イギリス政府はユーゴスラヴィア情勢に関心をもっていたが、外国の国内問題に対して不必要な内政干渉をしないというのが基本的立場であった。したがって、彼はここでもまた外相に会うことができなかった。イギリス外交部はトルムビッチを第一次世界大戦時の著名な政治家としてではなく、野党の代表として受け入れたためである。しかし、ロンドンではトルムビッチは政界に影響力がある著名人を友人にもっていた。これには、R・W・シートン＝ワトソン、W・スティード、A・エヴァンズなどユーゴスラヴィア情勢に造詣の深い知識人が多かった。彼らに対し、トルムビッチは意を強くしてユーゴスラヴィアの政治危機の性格を説明した。ここでもまたトルムビッチは問題の所在はセルビア人とクロアチア人の民族対立ではなく、旧セルビア王国人と旧ハプスブルク人の地域的な対立であることを強調し、問題の解決策は国家の連邦制化か、共通の国王によって結ばれた国家連合になることを述べた。彼らは政府関係者よりもはるかにユーゴスラヴィアの危機に関心を示し、トルムビッチの説明を受け入れた。以上、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, pp.23-27。

111　以上、Ljubo Boban, Maček i politika HSS 1928-1941 1, p.32。

112　以上、ibid., p.34。なお国王の信任の厚いクロアチア人政治家であるマテ・ドリン

コヴィッチ（元クロアチア同盟の指導者で、独裁制導入後に組閣された内閣で社会政策相に起用された人物）は、国王の指示によって、1928年12月にマチェックと二度会談をおこなっている。国王はドリンコヴィッチを通して国王親政の意向をマチェックに示唆した。このときマチェックは、政党と議会政治によっては問題を解決することができず、選挙をやっても無駄だと考えていた。彼は事態を打開するためには議会勢力によらない政府を形成することが最良の方法であり、それは独裁制的な政権になってもやむを得ないと考え、これを、ドリンコヴィッチを通して国王に伝えた。以上、Gligorijević, Demokratska stranka i politički odnosi u Kraljevini Srba, Hrvata i Slovenaca, p.545。

さらに独裁制の導入の口実となった1929年１月初めの政治指導者との協議についてもあらかじめシナリオが用意されていた。あるクロアチア人政治家（ミリヴォイ・デジュマン）は12月にドリンコヴィッチを通して国王にこう助言している。「政治危機が始まりましたら、国王陛下は48時間という短い期限を区切ってあらゆる議会主義的な解決を模索し、これが失敗に帰したあとで、非議会主義的な政権の形成をおこない、陛下はやむを得なくこのような措置に踏み切らざるを得なくなったという形にするのがもっとも賢明でありましょう」。国王はまさにこの助言に沿った行動をとった。以上、ibid., p.546。

113　以上、Rudolf Horvat, Hrvatska na Mučilištu, p.416、

114　以上、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, p.219。

115　かつては激しく反目した二つの政党が同盟関係を結んで結成された農民・民主連合は、ステェパン・ラディッチとスヴェトザール・プリビーチェヴィッチの二人の最高指導者が固い信頼関係で結ばれ、相互に譲歩しあうことでバランスと結束が保たれていた。しかし、６月20日の事件とその後のラディッチの死はこのバランスを崩し、農民・民主連合の内部に少なからぬ不協和音を発生させた。それには二つの要因があった。第一に６月20日の事件のあと、とくにラディッチの死後にクロアチア農民党の指導部は独自の行動が目立つようになった。それまではクロアチア農民党と独立民主党は別々の会議を開くことはなかった。しかし、ラディッチの死後は、両党は独自に決議を採択し、その上で農民・民主連合の合同会議を開いて共通の決議を採択する手続きをとった。第二にそれにもかかわらずプリビーチェヴィッチはクロアチア農民党の行動に対し寛容な態度を続けたが、このことに対し独立民主党のメンバーから不満の声がたびたび上がるようになったことである。彼らはプリビーチェヴィッチの態度が独立民主党の原則的立場の否定に結びつかないかを警戒し、プリビーチェヴィッチにしばしば苦言を呈した。

農民・民主連合の内部の不協和音は1928年８月末の国際議会連盟の大会への代表団の派遣をめぐって表面化した。農民・民主連合はユーゴスラヴィアの議会代表団に加わらないことを決めていたが、クロアチア農民党の指導部は農民・民主連合の会議に諮らずにユーゴスラヴィアの議会代表団の代表資格を問題とする抗議文書を国際議会連盟の指導部に送り、さらにイワン・クルニェヴィッチをベルリンに派遣した。クロアチア農民党の国際議会連盟への対応に対し、独立民主党のスヴェティスラフ・ポポヴィッチは連合のパートナーに何の連絡もなかったと不満をにじませるコメントをセ

ルビア系の日刊紙『ポリティカ』に発表した。これに対し、クロアチア農民党議長のマチェックは、クロアチア農民党はクロアチア人を代表し、農民・民主連合はクロアチア人だけでなくすべてのプレチャニンを代表すると述べ、クロアチア人代表としてクルニェヴィッチの派遣を決めたクロアチア農民党の行為を正当化した。国際議会連盟に送った電報については、クルニェヴィッチの出発前に作成してプリビーチェヴィッチには正確な内容を伝えることができなかったが、電報を送ることとクルニェヴィッチを派遣することはプリビーチェヴィッチに伝えていたと釈明した。

この回答に満足しない独立民主党のプリヴィスラフ・グリソーゴノはマチェックとプリビーチェヴィッチの二人の代表に対し、抗議の書簡を送った。その中で彼は、最近の指導部は農民・民主連合の内部にある重大な誤解の存在に十分な注意を向けていないと指摘し、農民・民主連合の政策が強固な基礎の上に構築されていないことを警告した。彼によれば、農民・民主連合の中には６月20日の事件以前から危険な傾向があった。それはセルビア人の存在を無視し、クロアチア人の権利やクロアチア国家だけを強調する一部のメンバーの態度である。このような傾向が続けば、故ステェパン・ラディッチの大所高所に立った判断と寛容な精神によって実現した農民・民主連合の協力関係は危殆に瀕することになるとグリソーゴノは主張した。彼によれば、ベルリンへの代表派遣に関する問題はこの傾向の一つの表出にすぎない。彼はマチェックの発言を念頭に、これはクロアチア農民党だけの問題だとする見解には同意できないと述べた。それぞれの党は勝手に独自の行動をとってよいというのはこの連合の結成の精神に反すると自分は考える。こう述べて、グリソーゴノは、農民・民主連合の議員総会を招集し、この問題の見方を明らかにするとともに、明確な手続きを確定することを指導部に求めた。

しかし、農民・民主連合の議員総会は開催されず、その代わりに８月23日に幹部会がリュブリャーナで開催された。この幹部会では、国際議会連盟のベルリン大会に関してクロアチア農民党の指導部がとった手続きが取り上げられた。議論の結果、採択された決議は、クロアチア農民党がとった行為を農民・民主連合は承認するとしたが、同時にこの行為はもっと強固なものにすべきだと注文がつけられた。これ以外の点では幹部会の結論は農民・民主連合の結束を強調する方向に収斂した。ベオグラードから派遣された議会代表が国家を代表する資格がないという農民・民主連合の見解をまとめるため、特別の委員会が設置され、委員が選ばれた。採択された決議はまた、国民の一部しか代表しない国民議会の代表団がベルリンの国際議会連盟の大会に参加することに反対するとしたクロアチア人の議会代表（＝クロアチア農民党）がおこなった８月20日付けの抗議を支持し、これに連帯すると述べていた。

プリビーチェヴィッチは農民・民主連合の議長の一人として決議をまとめたが、クロアチア農民党の行動に対する彼の寛容な態度には独立民主党の議員の中に不満をもつ者がいた。それゆえ、８月下旬、幹部会に参加しなかったグリソーゴノらの提案により、独立民主党は独自に議員総会を開催した。会議の参加者の中にはクロアチア農民党の分離主義的な行動を厳しく批判する者がいた。さらにこのような傾向を容認している執行部の方針は誤った寛容さではないかという疑問が投げかけられた。執行部に対する批判にプリビーチェヴィッチは、クロアチア農民党の行動を決して見過ごし

ているわけではないと反論した。彼は自分の行動を「戦術」としてこう弁護した。クロアチア人大衆の信頼を得ることは絶対必要であり、クロアチア農民党に細かな釈明を強要することは得策ではない。それは農民・民主連合の結束を台無しにするからだ。独立民主党はそのイデオロギーに基づいてポジティブな行動をとる必要がある。プリビーチェヴィッチは最後にこう述べた。「我々が自分たちのイデオロギーを否定するなどという杞憂をもつ必要はない」。独立民主党の議員はこの言葉に満足し、党首のプリビーチェヴィッチに信任を表明した。以上、Matković, Svetozar Pribičević; ideolog-stranački vođa-emigrant, pp.213-216。

もっとも、これで問題は収まらなかった。その後もマチェックを中心とするクロアチア農民党の指導部は実質的には連邦制の導入を求める発言を繰り返し、これに対してプリビーチェヴィッチは批判を加えず、クロアチア農民党と独立民主党の見解の不一致を極力表面化させないように努めた。

それゆえ、独立民主党の一部にはプリビーチェヴィッチの態度に対する不満がくすぶっていた。この不満は1928年12月１日にザグレブで起こった事件をきっかけに表面化した。独立民主党の一部の議員（グレゴール・ジェラーフ、スヴェティスラフ・ポポヴィッチ、グリソーゴノ、スルジャン・ブディサヴレヴィッチ）は軍隊を侮辱したクロアチア人の若者の行為を非難した。しかし、プリビーチェヴィッチはデモの参加者はもっともな権利があると述べ、党の機関誌も彼らの行為を軍隊に対する侮辱だとする見方には保留を表明した。グリソーゴノはこの件についてプリビーチェヴィッチを非難し、離党も辞さない構えを示した。以上、ibid., p.217。

なおプリビーチェヴィッチと対立したグリソーゴノはダルマチア沿岸の都市スプリットの選挙区の選出の議員であった。ダルマチアはイタリアの侵略に対する脅威から、ユーゴスラヴィア国家に対する安全保障上の期待が大きい地域であった。それゆえ、彼は独立民主党の党是である単一国家・単一国民主義を強く信奉し、連邦制の導入を求めるクロアチア農民党幹部の発言に大きな反感をもっていたと推測される。